

「海の古墳」研究の意義、限界、展望

魚津知克

【要約】 本論文では、「海を舞台とした人間活動と深い関連をもつ脈絡により、海の近くに築造された古墳」である「海の古墳」を研究することの意義と限界、そして展望を示す。まず、研究の意義として、首長墳の立地論や、海浜部の複合生産型臨海集落との関連、北方・南方の海蝕洞穴墓や海岸墓にも視点が広がることを挙げる。続いて、「規模」「立地」「海岸線と前方部の向きとの関係」という三項目での分類案を提示する。これにより、集団構成員から支配者層に至るまで、地域や時期の傾向を持つて築造されたことが明らかとなる。一方、研究の限界も存在している。「海の近く」が曖昧であり、「海を舞台とした人間活動」も切り分けが難しい。それぞれ打開案を示したが、多くの分析検討の余地がある。しかし、古墳時代の生業や生産のあり方や、王権の統治原理や一般の生活論理を知る重要な糸口が、「海の古墳」から見えてくる。古代世界全体へと、研究の展望がひろがる。

史林 一〇〇巻一号 二〇一七年一月

序 章

日本の古墳の中には、海岸のすぐ近くに位置するものが存在する。次章以降で示すように、列島の各地に類例を見いだせる。その代表例である兵庫県神戸市五色塚古墳（第1図）^①は、海とのつながりを強烈に印象づける、まさに庄巻の立地だが、海を見わたせる位置に築造された古墳は、列島各地に存在する。

古墳が、人類史上でも異例の、政治的秩序を記念物として明示する仕組みの所産、すなわち「統治のための墳墓」^②なら



第1図 五色塚古墳と大阪湾

ば、古墳の立地も、その仕組みと不可分である。先述した強烈な印象は、決して、現在のわれわれだけの、過去への一方的な思い込みではない。同じ景観のなかに存在するとき、現在と過去との対話の扉は、ゆつくりと開き始めるのである。つまり、海岸近くに位置するとみなされる「海の古墳」そのものや、関連する資料の実証的な分析は、古墳時代の社会や文化に対する理解につながる可能性を秘めている。しかし、現地での印象があまりにも強烈であるがゆえに、推測を極力排除した形で、冷静な分析をおこなうことは、容易でないのも事実である。思念の渦潮に溺れず、資料的な限界を限界としてわきまえ、その上で、学問的な展望を提示する必要があるだろう。

本稿は、以上の観点に立ち、第一章で「海の古墳」の概念が持つ研究史上の意義を示す。そして、先行研究の内容をふまえた「海の古墳」の構成を第二章で概観する。一方、「海の古墳」については、主に定義上の問題を多く含んでいる。このため、考古学的方法で「海の古墳」の研究をおこなう上では、限界が存在するのも事実である。それを第三章で示す。最後に、その限界を認識した上で、今後の研究にひらか

れている展望を、第四章にて提示する。

① 丸山潔・平田朋子（編）『史跡五色塚古墳 小壺古墳 発掘調査・復元整備報告書』神戸市教育委員会、二〇〇六年。

② 福永伸哉「日欧墳丘墓くらべ」『歴博』第一九七号、二〇一六年。

第一章 研究史における「海の古墳」の意義

「海の古墳」は、付けられた名称こそ様々であるが、研究史上の早い段階から注目されてきた。本章では、先行研究を概観し、その中で示された「海の古墳」の意義を論じる。

一 瀬戸内海の「海の古墳」——政治・社会体制へのまなざし——

一九五〇年代、すでに近藤義郎が、岡山県牛窓湾を取り巻く前方後円墳や群集墳に着目している。近藤は、「農業生産の発達を望むべくもないこの地方に築造された」、全長五〇メートル―九〇メートル規模の前方後円墳の背景に、「倭政権」の朝鮮半島南部の進出にあたっての「内海航路の安全と補給」を見出した。ここで明記せねばならないのは、近藤が、漁業や製塩といった地域内で営まれる生産活動との関連性や、「家父長家族の成立」を後期群集墳の築造背景と評価する場合の整合性に対して、細心の注意を払っているという点である。

つづいて、西川宏らが瀬戸内海全域を概観し、海との関連が深い古墳を抽出した。西川らは、瀬戸内海北側一帯、また南側の一部の海岸や島嶼に立地する前期古墳について、「付近には湾入や小島の集まりがあつて、港湾や泊地としての機能を十分にはたすような地でもある」ことを指摘した。そして、「沿岸の拠点は瀬戸内航路上の中継基地的性格をもつ」ものであり、沿岸拠点の盛衰は対外軍事活動と密接な関連性をもっていたと述べている。

その数年後、間壁忠彦も瀬戸内海を対象に論じている。間壁は、牛窓湾、岡山平野南部、香川県津田湾、山口県熊毛半

島における類例を丁寧で紹介しつつ、「地域勢力の内海に対する意欲と大和政権の内海支配の両面に関係したもの」と結論付ける。この点では、先行研究を踏襲するものの、岡山県高島や香川県荒神島で認められる海上祭祀との関連性も同時に指摘している点が注目される。また、瀬戸内の海浜や島嶼におびただしい数で出現する後期古墳を「土器製塩を含めた海浜生産に従事する集団の築造」として把握しようとしたこと、吉備の「後期のいちじるしい沿岸古墳」を見島屯倉との関連で理解しようとしたこと、さらには「大和政権の内海航路支配」が前半期古墳の時期と後期古墳の時期とでは質的な転換を示した可能性を示唆したことにも注意しておきたい。

このように高まってきた、瀬戸内海地域を対象とした前期・中期の首長墳立地論は、西谷真治や山本三郎の論考へと受け継がれていく。^⑤

二 日本海の「海の古墳」——地理特性と交易流通へのまなざし——

一九八〇年代に入ると、日本海側にも臨海に立地する古墳が存在していることが提唱された。森浩一は、復元される潟湖の分布と、首長墓の分布が強い相関を示すと指摘し、日本海一帯での複合的生業の確立、海上交通による交易の進展、遠隔地交流に立脚した政治権力の形成を説いた。^⑥これは、丹後を代表する大型前方後円墳である、京都府京丹後市網野銚子山古墳や神明山古墳が、ともに古代の潟湖に接するとの指摘を、日本海側一帯に敷衍したものである。「潟を維持し、そこでの港の機能をも維持しつづけるには、土木技術とそれに動員できる労働力、さらにその労働力を組織し運営できる政治勢力が政治体制、さらにはその労働力を支える経済力などが必要である。」という一文に示されるように、複合的生業と交通の進展、そして交易に立脚した政治権力の形成とネットワーク化に着目した点はまさに卓見である。日本海沿岸地域の特性に着目する視点は、高橋浩二、大賀克彦、伊藤雅文によって継承されていく。^⑦

三 一九八〇年代以降の動向

(一) 臨海の生産遺跡の調査成果と遺物研究の進展

ほぼ時を同じくして、「海を舞台とした人間活動」を示す考古資料が充実した。一九八〇年前後から、福岡県福岡市海の中道遺跡^⑪、和歌山県和歌山市西庄遺跡^⑫、愛知県東海市松崎遺跡^⑬といった、製塩・漁撈に加え鉄器製作（鍛冶）や骨角器製作といった多様な生産を展開する、海浜部の複合生産型集落が調査・報告されたのである。これらをはじめ、古墳時代の漁撈・製塩に関連する考古資料の全国的な集成がなされ、新たな古墳時代地域社会像の提示の基礎となった^⑭。

一方で、遺物研究からのアプローチも進展した。山中英彦による、漁具副葬の背景についての論考^⑮がその嚆矢である。山中はその後、福岡県北九州市貝島古墳群などの島嶼部の様相を丹念に分析しつつ、漁具副葬古墳と海人集団との関係について論考を深めていく^⑯。

(二) 近年の研究動向

資料の充実により、研究にも新視角がひらかれてきた。具体的には、関東・東北の海蝕洞穴墓葬^⑰、また南西諸島における海岸墓葬についても視点が広がり、多くの研究者によって、「海 of 古墳」の内容が議論されている。広瀬和雄は、大阪湾を取り巻く大型前方後円墳の配置に着目し、その影響を関東地方南部の首長墓にも見出し、さらに「海浜型前方後円墳」として全国へと敷衍した^⑱。一方、地域内の社会的特性や地域間の交流関係の特徴を示す考古資料を見極めつつ、各地の「海 of 古墳」の実態を明らかにすることを目的とした研究会（海 of 古墳を考える会）も、各地の研究者による企画・協力のもと、二〇一一年より年一回開催されている^⑲。

これらを通して、時期や形態に差異はあるものの、以上の人間活動と密接に関連する形で、九州地方から東北地方にか

けての広い範囲の沿岸部で、多くの古墳が海の近くに築造されたことが明らかとなった。さらには、朝鮮半島に存在する「倭系古墳」の中にも、「海の古墳」と呼べるものが存在していることも指摘されている。^②

四小 結

以上に示した研究の流れから、「海の古墳」研究の意義について、大きく次の二点にまとめることができる。

第一に、古墳の立地を捉えなおすきっかけとなった点が挙げられる。近藤義郎が牛窓湾沿岸の古墳で指摘したように、農業生産を基礎としていたとは考えられない立地をとる前方後円墳が少なからず存在している。また、瀬戸内海や日本海の沿岸ではそれらが横のつながりを持っていることも、西川宏らの指摘によって明らかとなった。古墳の築造背景が単純なものでなく、地理的環境をふまえなければならぬこと、また立地分析も地域内で完結するものでなく、ネットワーク的な視点が必要であることが、ここから示される。

第二に、海という自然環境に対応しつつ過去の人間社会が残した「臨海遺跡」の一形態として、「海の古墳」を位置づける視座が確立した点が挙げられる。海浜部で発掘された複合生産型集落の内容は、古墳時代の社会構造を雄弁に物語るものであり、「海の古墳」の築造背景を知る重要な資料であるのは疑いない。また、森浩一が、日本海側において、潟湖に面した古墳を認識したうえで提唱した論点も、この視座を共有する。森の議論は、日本海側特有の臨海環境や、生業・生産の展開に大きな基礎を置きつつ、地域の主体性を持った支配権力の確立を説くものであり、古墳時代における自然環境と社会環境とのオーバーラップを臨海の遺跡と古墳とに見出したのである。

以上の二点は、いずれも、「統治のための墳墓」である古墳の本質を、古墳社会全体を見渡した上で浮き彫りにするものである。「海の古墳」研究は、その意味でも大きな意義を持っていると言いうことができる。

① 研究史上は、「海辺の古墳」「臨海性の古墳」「海を意識した古墳」

「海人の古墳」、また一部を対象に「海浜型前方後円墳」等と呼ばれ

る。「海の古墳」という名称を採用したのは、大久保徹也が最初であると思われる。(大久保徹也『「海の古墳」の消長とその意義』『紀淡海峡の民』、和歌山県立紀伊風土記の丘、二〇〇六年)。

- ② 近藤義郎「牛窓湾をめぐる古墳と古墳群」『私たちの考古学』一〇、一九五六年。

- ③ 西川宏(ほか)「瀬戸内」『日本の考古学』Ⅳ古墳時代上、河出書房新社、一九六六年。

- ④ 間壁忠彦「沿岸古墳と海上の道」『古代の日本』4 中国・四国、角川書店、一九七〇年。

- ⑤ 西谷真治「海人びとの墓」『展望 アジアの考古学』樋口隆康教授退官記念論集、新潮社、一九八三年。山本三郎「王権と海上交通・序説」『列島の考古学』渡辺誠先生還暦記念論集、渡辺誠先生還暦記念論集刊行会、一九九八年。

- ⑥ 森浩「古代日本海文化と仮称「潟港」の役割」『古代日本海文化の源流と発達』、大和書房、一九八五年。森浩「潟と港を発掘する」『日本の古代』第3巻、中央公論社、一九八六年。

- ⑦ 三浦到「丹後の古墳と古代の港」『考古学と古代史』同志社大学考古学シリーズ1、同志社大学考古学シリーズ刊行会、一九八二年。

- ⑧ 前掲、森浩「潟と港を発掘する」、六〇頁。

- ⑨ 高橋浩二「潟湖環境と首長墳」『富山大学考古学研究室論集 歴史楼』、六、書房、二〇〇三年。高橋浩二「日本列島と日本海」『日本海／東アジアの地中海』、桂書房、二〇〇四年。高橋浩二「潟湖環境と地域間ネットワーク」『海域世界のネットワークと重層性』、桂書房、二〇〇八年。大賀克彦「ルリを纏った貴人」『小羽山墳墓群の研究』研究編、福井市立郷土歴史博物館、二〇一〇年。伊藤雅文「今、どうして潟湖の古墳なのか」『日本海の潟湖と古墳の動態』研究集会海の古墳を考えるⅤ(福井)予稿集、研究集会「海の古墳を考えるⅤ」実行

行委員会、二〇一五年。

- ⑩ 山崎純男(編)『海の中道遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第八七集、福岡市教育委員会、一九八二年。

- ⑪ 富加見恭彦(編)『西庄遺跡』、財団法人和歌山県文化財センター、二〇〇三年。

- ⑫ 杉浦章(ほか)「松崎貝塚」、東海市教育委員会、一九七七年。福岡晃彦(ほか)「松崎遺跡」愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第二〇集、財団法人愛知県埋蔵文化財センター、一九九一年。

- ⑬ 埋蔵文化財研究会第十九回研究集会世話人「海の生産用具」、一九八六年が最初の集成であり、つづいて、埋蔵文化財研究会第五六回研究集会実行委員会「古墳時代の海人集団を再検討する」、二〇〇七年。

- ⑭ 下條信行「弥生時代の玄界灘海人の動向」『生産と流通の考古学』横山浩「先生退官記念論文集Ⅰ、横山浩」先生退官記念事業会、一九八九年。青柳泰介「古墳時代の『山野河海』」奈良県の動向を中心に「古墳時代の海人集団を再検討する」発表要旨集、第五六回埋蔵文化財研究会実行委員会、二〇〇七年。

- ⑮ 山中英彦「鉄製漁撈具出土の古墳について」『古代探査』、早稲田大学出版部、一九八〇年。

- ⑯ 山中英彦「藍島・六連島の海人文化」『日本海と出雲世界』海と列島文化2、小学館、一九九一年。山中英彦「考古学からみた海人族の東遷」『西海と南島の生活・文化』古代王権と交流8、名著出版、一九九五年。

- ⑰ 西川修一「首長と中間層」『海浜型前方後円墳の時代』公益財団法人かながわ考古学財団二〇周年記念事業シンポジウム、公益財団法人かながわ考古学財団、二〇一三年。

- ⑱ 広瀬和雄「畿内五大古墳群の政治的配置」『古代王権の空間支配』、青木書店、二〇〇三年。

①⑨ 広瀬和雄「東京湾岸・『香取海』沿岸の前方後円墳」『国立歴史民俗

博物館研究報告』第一六七集、国立歴史民俗博物館、二〇一二年。

②⑩ 広瀬和雄「海浜型前方後円墳を考える」『海浜型前方後円墳の時代』、

同成社、二〇一五年。

②⑪ 宮元香織「研究経過と海の高墳研究の意義」『海の高墳を考えるⅡ』、

海の高墳を考える会、二〇一二年。これまで、福岡県北九州市、愛媛
県今治市、和歌山県和歌山市、福島県いわき市、福井県福井市で開催
された。

②⑫ 李東熙「韓半島南海島嶼部における古墳の展開」『海の高墳を考え
るⅡ』、海の高墳を考える会、二〇一二年。

第二章 「海の高墳」の構成

以上のように、研究史における「海の高墳」の認識を示してきたが、大小様々な古墳が「海の高墳」としてこれまで示されてきたことに気づく。「海の高墳」を資料として考古学的に研究することの意義が一通り認識された現在、その資料的な構成を改めて明示することが必要であると考ええる。

本章では、この観点から、「海の高墳」を分類し、それぞれの具体例を示す。分類視点として、「規模」、「立地」、「海岸線と前方部の向きとの関係」という三点に着目する。このうち、「海岸線と前方部の向きとの関係」は、前方後円墳・前方後方墳・帆立貝式古墳のみに適用する基準である。

一 規模による分類

以下のように、AからCの3群に大別し、Cを1・2の小群に細別する。

A群 地域内集団構成員の墓としての「海の高墳」…地域内の集団構成員の墓としては、宮崎県日向市伊勢ヶ浜（富高）古墳群（七基が確認されている群集墳…後期^①）や福岡県新宮町相島古墳群（二五一基が確認されている群集墳…前期中頃～飛鳥時代^②）といった高塚墳墓群、福島県いわき市餓鬼堂横穴群（三九基以上の横穴群…後期初頭～飛鳥時代^③）のような横穴群、さらには茨城県磯崎東古墳群（墳丘を持つ古墳も含め五四基以上の群集墳…中期後半～飛鳥時代^④）の一部や、兵庫県神戸市舞子浜植



第2図 舞子浜遺跡の埴輪棺墓

輪棺墓群（一九基を確認…前期末…第2図^⑤）のように墳丘を持たず石棺や埴輪棺を埋葬施設とする類例が存在する。多様な葬制を含む点に、注意しておきたい。

B群 地域首长墓としての「海の古墳」…地域集団を統括していた首长の墓としては、兵庫県神戸市大歳山2号墳（全長二八メートルの前方後円墳…後期前半^⑥）、和歌山県有田市椒古墳（全長約二五メートルの帆立貝式古墳か…中期後半^⑦）、三重県志摩市おじよか古墳（直径一〇メートルの円墳か…中期末^⑧）、などを挙げることができる。数十メートル規模の前方後円墳や帆立貝式古墳、あるいは主として横穴式石室導入後の主要円墳である。

C1群 地方支配者層の墓としての「海の古墳」…さらに広範囲の領域に及ぶ政治的連合体の支配者層の墓としては、九州中部の熊本県宇城市国越古墳（全長六二・五メートルの前方後円墳…後期前半^⑩）、吉備の岡山県岡山市湊茶臼山古墳（全長一二五メートルの前方後円墳…前期末^⑪）、丹後の京都府京丹后市網野鈿

子山古墳（全長一九八メートルの前方後円墳…前期後葉^⑬）や京都府京丹後市神明山古墳（全長一九〇メートルの前方後円墳…前期末^⑭）、越の福井県福井市免鳥5号墳（全長九〇・五メートルの造り出し付円墳…中期初頭^⑮）などがある。前期から中期にかけては全長約一〇〇メートル、後期では全長六〇メートル以上の前方後円墳・前方後方墳、およびそれらに追隨する規模の帆立貝式古墳・造り出し付き円墳・大形円墳である。

C2群 大阪湾岸における近畿中央部支配者層の「海の高墳」…倭王権中枢である近畿中央部政権の支配者層も、大阪湾岸に「海の高墳」を築造した。兵庫県神戸市五色塚古墳（全長一九四メートルの前方後円墳…前期末^⑯）、西求女塚古墳（全長九八メートルの前方後方墳…前期初頭^⑰）、大阪府堺市乳岡古墳（全長一五八メートルに復元される前方後円墳…前期後葉^⑱）、大阪府岬町西陵古墳（全長二二〇メートルの前方後円墳…中期前葉^⑲）や大阪府岬町淡輪ニサンザイ古墳（現在五十瓊敷命宇度墓に治定されている全長約一七〇メートルの前方後円墳…中期中葉^⑳）をあげることができる。墳形や規模は基本的にC1群と同様だが、時期によっては全長二〇〇メートルをこえる規模の前方後円墳も存在するのが、大阪湾岸に位置する「海の高墳」の特徴である。

なお、列島最大の前方後円墳である大阪府堺市大山古墳（現在仁徳陵に治定されている全長四八六メートルの前方後円墳…中期中葉^㉑）や大阪府堺市ミサンザイ古墳（現在履中陵に治定されている全長三六〇メートルの前方後円墳^㉒）は、第三章一で後述する、当時の海岸線からの距離による本稿での「海の高墳」の定義により除外されるものの、海を意識した築造が繰り返し指摘されている。^㉓

二 立地による分類

以下の3類に区分する。

S類 海拔一〇メートル以下の海岸部に立地していたと考えられる、「海の高墳」。前記の伊勢ヶ浜（富高）古墳群、相島



第3図 免鳥5号墳の立地

古墳群、餓鬼堂横穴群、舞子浜埴輪棺墓群、椒古墳、西求女塚古墳、乳岡古墳等が該当する。

t 類 海拔一〇メートル～五〇メートルという比較的低位の海岸段丘・丘陵・砂丘上に立地している「海の古墳」。磯崎東古墳群、大歳山2号墳、おじよか古墳、網野銚子山古墳、神明山古墳、五色塚古墳、西陵古墳、淡輪ニサンザイ古墳が該当する。なお、「海の古墳」の定義からは除外するものの、大山古墳やミサンザイ古墳も、同じ範疇に属する。

u 類 海拔五〇メートルをこえる中位以上の海岸段丘・丘陵に立地している「海の古墳」。国越古墳、湊茶臼山古墳、免鳥5号墳(第3図)が該当する。

現在、「海の古墳」の類例について、立地を検討している段階であり、定量的な提示は今後の課題であるものの、以下のような傾向が指摘できそうである。

A群については、舞子浜埴輪棺墓群が前期末のs類、伊勢ヶ浜（富高）古墳群や餓鬼堂横穴群は後期以降にs類、磯崎東古墳群は中期後半以降にt類というように、地域ごとに異なった動態を示す。

B群およびC1群については、t類の割合が最も多く、s類がこれに続く。u類は前期から中期にかけての瀬戸内海沿岸地方や中期の北陸地方のように、地域あるいは時期が限定されると考えられる。

C2群は、前期前葉から中葉においては、西求女塚古墳をはじめs類が優勢であったのが、前期末から中期中葉にかけては五色塚古墳、西陵古墳、淡輪ニサンザイ古墳にみられるようにt類が主体となる。中期後葉から後期にかけては、兵庫県西宮市津門稲荷山古墳（復元長約四〇メートルの前方後円墳^④）のように、墳丘が小規模となる傾向が著しいものの、s類に回帰する傾向がある。

三 前方部の向きによる分類

以下の三つの型を設定する。

I型 墳丘主軸が海岸線にほぼ平行するもの。これまで言及した前方後円墳・前方後方墳では、湊茶臼山古墳、網野銚子山古墳、神明山古墳、西求女塚古墳（第4図）、乳岡古墳、淡輪ニサンザイ古墳が該当する。他に、福岡県荊田町御所山古墳（全長約二〇メートルの前方後円墳・中期中葉、C1群s類^⑤）や、千葉県富津市内裏塚古墳（全長一四四メートルの前方後円墳・中期中葉、C1群s類^⑥）が挙げられる。

前期段階では、瀬戸内海沿岸のB群・C2群のs類、日本海側では丹後地域のC1群t類に採用される。先述のように、前期末から中期にかけてC2群はt類が多数を占めるが、そのほとんどはI型である。また、他地域でもこの時期のC1



第4図 西求女塚古墳の立地と海岸線に対する主軸方向

群にⅠ型が目立つ。大阪湾岸の傾向と一致するのだが、御所山古墳や内裏塚古墳のように、中期におけるCⅠ群Ⅰ型の類例の多くは、s類の立地となる。近畿中央部と地方とは、立地がいささか異なることが注目される。

Ⅱ型 前方部を陸側に向ける（後円部を海側に向ける）もの。これまで言及した国越古墳のほかに、茨城県ひたちなか市川子塚古墳（全長約八一メートルの前方後円墳…中期後葉、B群t類^{②⑦}）等が存在する。類例が少数にとどまるため、地域的・時期的傾向を見出しにくいものの、s類の立地であるⅡ型の類例は管見に触れていない。

Ⅲ型 前方部を海側に向ける（後円部を陸側に向ける）もの。先述した五色塚古墳、西陵古墳のほかに、大分県杵築市小熊山古墳（全長約一二〇メートルの前方後円墳…前期前葉、CⅠ群u類^{②⑧}）や山口県柳井市柳井茶白山古墳（全長約九〇メートルの前方後円墳…前期末、B群u類^{②⑨}、愛知県西尾市正法寺古墳（全長八六メートルの前方後

円墳・中期初頭、B群^⑤が存在する。

瀬戸内海沿岸では前期から類例が存在する。前期後葉から末にかけて、列島の広い範囲で採用される。特に、前期末から中期中葉には、B群^⑤類Ⅲ型の類例を各地で見出すことができる。

- ① 鳥居龍蔵『上代の日向延岡』、鳥居人類学研究所、一九三五年。緒方博文『伊勢ヶ浜古墳群』、『宮崎県史』資料編考古一、宮崎県、一九九三年。
- ② 西田大輔『相島積石塚群』新宮町埋蔵文化財発掘調査報告書一六、新宮町教育委員会、一九九九年。
- ③ 財団法人いわき市教育文化事業団『餓鬼堂横穴群の発掘調査―馬具をともしなう装飾横穴の発見―』『文化財ニュース』第六六号、財団法人いわき市教育文化事業団、二〇一一年。財団法人いわき市教育文化事業団『餓鬼堂横穴群の発掘調査―平成二三年度 調査成果―』『文化財ニュース』第六七号、財団法人いわき市教育文化事業団、二〇一二年。
- ④ 井上義安・斉藤新ほか『那珂湊市磯崎東古墳群 国民宿舍白亜紀荘増改築に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書』、那珂湊市磯崎東古墳群発掘調査会、一九九〇年。稲田健一『イワキとヒタチ』『海の古墳を考える』Ⅳ、第4回海の古墳を考える会、二〇一四年。
- ⑤ 丸山潔『舞子浜遺跡第五次調査』『平成五年度 神戸市埋蔵文化財年報』、神戸市教育委員会、一九九六年。前田佳久・浅谷誠吾『舞子浜遺跡第七次調査』『平成五年度 神戸市埋蔵文化財年報』、神戸市教育委員会、一九九六年。谷正俊・前田佳久『舞子浜遺跡第八次調査』『平成五年度 神戸市埋蔵文化財年報』、神戸市教育委員会、一九九六年。谷正俊・中村大介『舞子浜遺跡第九次調査』『平成六年度 神戸市埋蔵文化財年報』、神戸市教育委員会、一九九七年。篠宮正・小川弦太（編）『舞子浜遺跡』兵庫県文化財調査報告第二七九冊、兵庫県教育委員会、二〇〇五年。
- ⑥ 大谷大学考古学研究会『69大蔵山』自主編集委員会（編）『69大蔵山 決着に時効は無い！ 自主報告書』、大谷大学考古学研究会、一九七二年。
- ⑦ 末永雅雄『椒浜古墳』『初島町誌』、初島町教育委員会、一九六二年。西岡巖（編）『椒古墳調査概報』、有田市教育委員会、二〇一二年。
- ⑧ 三好元樹（編）『おじよか古墳（志島古墳群一ノ号墳）発掘調査報告 金属製品編』、志摩市埋蔵文化財調査報告4、志摩市教育委員会、二〇一六年。
- ⑨ この連合体について、筆者は「地方政權」と理解している。古墳時代において、『治天下大王』（熊谷公男『大王から天皇へ』日本の歴史〇三、講談社、二〇〇〇年。仁藤敦史『治天下大王』の支配観）『中期古墳とその時代』季刊考古学別冊二二、雄山閣、二〇一五年。の権力体（＝倭王權）では、近畿中央部の強い求心力を持つ政治連合（近畿中央部政權）が他の追隨を許さない中核であり、その力は列島の広範囲に及ぶものであった。しかし、この近畿中央部政權を担っていたと考えられる人々の墓とみなされる古墳と、九州北中部・吉備・出雲・越・毛野といった主要な地方広域政治連合を担っていたと考えられる人々の墓とみなされる古墳とは、墳丘形態・外部構造・副葬品に、明らかな量的差異がある一方、決定的な質的差異を見出しにくい。たとえば、埴輪の採用など、ある時期に質的差異を見出せても、その差

異は、後続する時期に解消する傾向が著しい。「統治のための墳墓」から読み取れる権力構造自体に決定的な差異がない以上、近畿中央部と同様に、主要な地方広域政治連合も、「政権」と呼ぶべきである。

- ⑩ 乙益重隆「国越古墳」『昭和四一年度熊本県埋蔵文化財緊急調査概報』、熊本県教育委員会、一九六七年。

- ⑪ 安川満(編)『漆茶臼山古墳』、岡山市教育委員会、二〇一三年。

- ⑫ 梅原末治「銚子山古墳」『京都府史蹟勝地調査会報告』第一冊、京都府、一九一九年。岡林峰夫(編)『網野銚子山古墳範囲確認調査報告書』、京丹後市文化財調査報告書第4集、京丹後市教育委員会、二〇一〇年。

- ⑬ 梅原末治「神明山古墳」『京都府史蹟勝地調査会報告』第一冊、京都府、一九一九年。吉田誠「神明山古墳」『京丹後市の考古資料』、京丹後市史料編、二〇一〇年。

- ⑭ 田邊朋宏(編)『免鳥古墳群 範囲確認調査概要報告書』、福井市教育委員会、二〇〇七年。

- ⑮ 帆立貝式古墳や造り出し付き円墳の築造背景に、倭王権からの直接規制を想定する論(小野山節「五世紀における古墳の規制」『考古学研究』第一六巻第三号、一九七〇年)は年代的齟齬に基づく反論が多いものの、これらの墳形を倭王権が主導した軍事や産業の組織編成と関連づけて理解する論者は依然存在する(沼澤豊「前方後円墳と帆立貝古墳」、雄山閣、二〇〇六年、二七―一二七頁。高橋克壽「5世紀後半の倭王権と帆立貝式古墳」『花園大学考古学研究論叢Ⅱ』、花園大学考古学研究室・三〇周年記念論集刊行会、二〇〇九年。筆者も、中期から後期に築造された概ね全長六〇メートル以上の規模の帆立貝式古墳・造り出し付き円墳について、この時期の倭王権の軍産複合体的性格を如実に反映する形で編成された軍事あるいは産業の組織責任者の墓として位置づけられると考える。

- ⑯ 第一章注①と同じ

- ⑰ 安田滋(編)『西求女塚古墳発掘調査報告書』、神戸市教育委員会文化財課、二〇〇四年。

- ⑱ 土井和幸・田村晃一・高瀬尚人「史跡 乳岡古墳の調査」『百舌鳥古墳群の調査3』、堺市教育委員会、二〇一〇年。土井和幸「乳岡古墳の調査成果」『百舌鳥野の墓開け』堺市文化財講演会録第2集、堺市、二〇一一年。

- ⑲ 梅原末治「泉南郡淡輪村の古墳」『大阪府史蹟名勝天然記念物調査報告』第三輯、大阪府、一九三二年。川西宏幸「田身輪の首長」『古墳時代政治史序説』、塙書房、一九八八年。

- ⑳ 本章注⑨と同じ

- ㉑ 末永雅雄「古墳の航空大観」、学生社、一九七五年。堺市文化観光局文化財課(編)『堺の文化財 百舌鳥古墳群』、二〇一四年。

- ㉒ 末永雅雄「古墳の航空大観」、学生社、一九七五年。関本優美子(編)『百舌鳥・古市の陵墓古墳』、大阪府立近つ飛鳥博物館図録五五、二〇一一年。

- ㉓ 一例として、森浩一「諸王権の造型」図説日本の古代第4巻、中央公論社、一九九〇年。

- ㉔ 合田茂伸(編)『津門稲荷町遺跡発掘調査報告書』西宮市文化財資料第四六号、西宮市教育委員会、二〇〇二年。

- ㉕ 長嶺正秀・宮川泰男「国指定史跡御所山古墳」、荻田町文化財調査報告 第一〇集、荻田町教育委員会、二〇〇八年。

- ㉖ 小沢洋「内裏塚古墳群」『千葉県の歴史』資料編考古2、千葉県、二〇〇三年。白井久美子「第2章古墳の様相」『古墳時代中期の房総』研究紀要二七、財団法人千葉県教育振興財団、二〇一二年。

- ㉗ 齊藤新「ひたちなか市川子塚出土の円筒埴輪について(Ⅰ)」『埴輪研究会誌』第4号、二〇〇〇年。

②⑤ 吉田和彦（編）『御塔山古墳発掘調査報告書』大分県杵築市埋蔵文化財調査報告書第一五集、杵築市教育委員会。

②⑥ 柳井市教育委員会（編）『史跡柳井茶臼山古墳―保存整備事業発掘

調査報告書―』、柳井市教育委員会、一九九九年。

②⑦ 三田敦司（編）『史跡正法寺古墳範囲確認調査報告書』吉良町埋蔵文化財発掘調査報告書第三集、吉良町教育委員会、二〇〇五年。

第三章 「海の古墳」研究の限界

前章までに示したように、「海の古墳」の意義は、研究史上でも広く理解されてきており、立地などで区分可能な複数の類型で構成されていることも明らかである。

一方で、「海 of 古墳」研究には、大きな限界も存在する。それは、定義上の問題であり、主に次の二つが存在する。第一に、「海 of 古墳」の範囲を明確にできる資料が不足しているため、研究に限界がある点である。第二に、「海を舞台とした人間活動」の規定に不明瞭な部分が残るため、研究に限界がある点である。それぞれについて、具体的に述べていく。

一 「海 of 古墳」の範囲

第一章で回顧した先行研究をふまえ、筆者は、「海を舞台とした人間活動と深い関連をもつ脈絡により、海 of 近くに築造された古墳」を「海 of 古墳」の定義とする。^①このような、最大公約数的な表現であれば、研究者間で一致するところである。

しかし、この、「海 of 近くに築造された」という定義には、実は客観的な基準が含まれていない。いったい、どこまでが、「海 of 近く」なのか。この点については、研究史上、明確な回答がなされていないと理解する。

古墳が築造された海岸地帯の地形によって、「海 of 近く」は差異があるだろうし、そもそも一律の基準を設けることに

どれほどの意味があるかという向きもあろう。しかし、何らかの客観的な基準がなければ、「海の古墳」をめぐる議論は、水掛け論に陥ってしまう。実際に、「海の古墳」の概念は、客観的な基準を欠いているがゆえに、しばしば批判、あるいは等閑視される。

以上のような課題を念頭に置き、筆者は、まず、古墳時代の推定海岸線から原則として八〇〇メートル、最長でも一キロメートル以内を暫定的基準として設定する。そして、実例を分析することで、暫定的基準の適否を実証的に議論することを提案する。先述の批判等を単に受け流すのではなく、真摯に向き合うべきだと考えるためである。この距離を暫定的基準とした主な理由として、下記の二つを挙げる。

第一の理由として、およそ徒歩一〇分強となる八〇〇メートルから一キロメートルの距離は、人々が五感で日常的な海とのつながりを認識できる限界ではないかと考えるからである。^②

第二の理由は、視界の中に古墳をはっきりと認めることのできる距離の設定である。古墳は、明確な墳丘を持ち、多くが葺石あるいは埴輪列といった外部施設を備える。視覚に訴えるモニュメントとしての性格を濃厚に有しており、海岸もしくは海上から、陸上の古墳の外部施設を含む全容を明瞭に視認できるか否かが、「海の古墳」の判定に直結する。^③

実例で考えてみよう。第5図に示したように、兵庫県芦屋市翠ヶ丘古墳群においては、金津山古墳（全長五五メートルの前方後円墳もしくは帆立貝式古墳…中期後葉、B群S類Ⅲ型^④）と、打出小槌古墳（復元長九〇メートルの前方後円墳…中期末、C2群S類Ⅲ型^⑤）とは、古墳時代の想定海岸線^⑥から、それぞれ約八〇〇メートル、約九〇〇メートルの距離にある。一方、芦屋親王塚古墳（現在阿保親王墓に治定されている直径三〇メートルの円墳…前期後半^⑦）は、当時の海岸線から約一・五キロメートルの距離にあり除外される（第5図）。確かに、親王塚古墳は前の二つの古墳よりも明らかに一段高い位置に築造されており、当時の海岸線あたりから、徒歩でたどり着くのは一仕事の距離である。この地域で実際に生活している筆者としては、親王塚古墳を海と直接関連付けるのは、かなり無理があるように感じられる。



第5図 金津山古墳・打出小槌古墳・芦屋親王塚古墳の立地

ここまで考えていくと、客観的なデータに基づく古墳時代の海岸線の復元こそが、「海の古墳」の抽出をおこなう上で、必須条件であることに気づく。海岸線の復元については、優れた研究が多く存在するものの、未だに列島全域を網羅するには至っていない。結果的に、抽出にあたっての必須条件が十分に満たされていない現状は、「海の古墳」の研究に限界が生じている状態だと指摘せざるを得ない。

海岸線だけでなく、海岸地形や景観の復元も課題である。例えば、河口の三角州地帯、特に普段穏やかな分流は、喫水が浅い古墳時代の船にとつて、天然の良港であつただろう。このような三角州地帯では、単純に海岸線を設定するだけでなく、当時の分流がどれほどの規模で、どのように分布していたのか、可能な限り復元する必要がある。

例えば、熊本県宇土市天神山古墳^⑨は、全長一〇七メートルの前方後円墳で、緑川河口の三角州地帯に位置している。現在の海岸線との距離は五キロメートル程度で、先述した定義では「海の古墳」には到底含まれない。だが、分流である浜戸川との距離は約六五〇メートルに過ぎず、これを重視するならばC1群S類Ⅲ型の「海の古墳」と位置付けられる。古墳周辺の一带について、当時の地形や景観を見直す必要がある。日本海側一帯で指摘されている「埋もれた潟湖」についても同様である。

二 「海を舞台とした人間活動」の規定

また、筆者の定義によるならば、古墳時代の「海を舞台とした人間活動」の内容も示す必要がある。以下の四つを、具体的な活動として示す。

- (1) 海・海産物を資源として利用する、生業活動もしくは生産活動。例えば、漁撈や製塩。
- (2) 海上で繰り広げられた、人・もの・情報のやりとり。すなわち、海上交通や海上交易。
- (3) 列島各地の海域で、あるいは列島をこえて渡海する形で実行される外交・軍事活動。

（4） 列島の範囲外から列島各地への海を越えた移住^⑩。

このうち、（1）の「海・海産物を資源として利用する、生産活動もしくは生産活動」以外の、交通・交易、外交・軍事、移住は、いずれも海に固有のものではなく、陸上でも行われている活動である。

日本列島が海に囲まれているから、交通・交易、外交・軍事、移住といった活動は、往々にして、「海上」もしくは「海を越えて」繰り広げられる。これらは本来、海に固有の人間活動ではない。換言するならば、海に固有な活動と、必ずしも海に固有ではない人間活動との双方が含まれているという点を無視して、「海の高墳」の背景を無分別に理解するならば、牽強附会の誹りは免れ得ないであろう。

しかし、実際には、これらを厳密に分離するのは難しい。そればかりか、高墳時代中期以降は、当時の社会自体が上記（1）から（4）の活動を統合させ、複合生産型臨海集落を海浜部に展開させる。その統合様相については、早野浩二（第6図）や田中元浩が整理したように^⑪、地域をこえて共通する要素が明確に認められる。「海を舞台とした人間活動」が、必ずしも海に固有でない人間活動を含んだまま分析せざるを得ないというのが現実である。この点も、定義上の問題として認識するべきである。

その問題乗り越える方法は、二つ考えられる。

一つは、「海を舞台とした人間活動」を「海の高墳」の基本的定義から除外する方法である。すなわち、「海の近くに築造された高墳」のみを「海の高墳」の基本的定義とし、「海を舞台とした人間活動」は「海の高墳」の十分条件とはならないと理解する。この方法は、命題論理としては正しいかもしれない。しかし、この方法を突き詰めると、高墳は高墳だけで理解するべきだということになりかねない。第一章で示した先行研究で提唱されたような、「高墳時代社会全体の理解から高墳の本質にせまる視座」が失われることを危惧する。

もう一つは、「臨海遺跡」の一形態であるという「海の高墳」の位置付けにこだわり、「海を舞台とした人間活動」の実

製塩遺跡における遺物相の比較

松崎遺跡

西庄遺跡

農具(土木具)		U字形鍬鋤先	曲刃鎌
工具		鉄製刀子 (付.鹿角製刀子柄)	鉄製刀子 (付.鹿角製刀子柄)
漁具	<網具>	管状土鍾(付.網針)	管状・瀬戸内型土鍾
	<釣具>	鉄製釣針	鉄製・鹿角製釣針 鹿角製疑似餌
	<刺突具>		鉄製鉚 鹿角製ヤス
	<陥穽具>	土師質飯蛸壺	須恵質飯蛸壺
武器(武器・馬具)	(武器)	鉄剣 装飾付大刀(金銅製・金具)	大刀 鉄剣 (付.鹿角製刀剣装具)
		鉄鏃	鉄鏃
	(馬具)	鉄製鉸具	鉄製鉸具
祭祀具		滑石製模造品 勾玉 有孔円板	勾玉 子持勾玉 有孔円板 剣 白玉
装身具		碧玉製管玉	碧玉製管玉 金環
紡織具		陶製・鉄製紡錘車	土製・石製・鉄製紡錘車
(その他)		生産用具製作関連 韃羽口 砥石 鉄滓 鹿角素材・未製品	韃羽口 砥石 鉄滓 鹿角素材・未製品

第6図 複合生産型臨海集落の内容(早野浩二による)

態を丹念に分析する方法である。これを実行することは容易ではないものの、優れた先行研究より二つの方向性を提示したい。

第一は、複合生産型臨海集落である西庄遺跡における人間活動を見つめた、久保和士の研究である^⑫。久保は、生産用具や動物遺体の分析を軸に、西庄で暮らした人々の季節ごとの漁撈活動の推移を見事に明らかにした。「盛夏には一部を除いて漁撈活動は活発ではないようである。おそらく製塩活動の盛期は本季であったのではないだろうか。」との記述^⑬からうかがえるように、遺跡で繰り広げられた活動の内容を実証的に分析するならば、概念上一括りにされた「海を舞台とした人間活動」も、時間という切り口で仕分けが可能なのである。

第二は、考古資料をもとに海上活動の

実態を見極め、瀬戸内海という実際の領域で「日常生活領域の連鎖」をトレースすることに成功した、柴田昌児の研究である。柴田は、船舶の形態、航海の方法、行動の類型を提示しながら、海辺の生活に関連する人間活動の実態を鮮やかに描き出した。^⑭ 古墳時代の芸予諸島周辺域における臨海遺跡が、比較的潮流の安定した海域に分布していることを指摘し、「こうした偏在的分布状況は周回行動と搬送行動の航路に沿っていると考えられ、塩の集荷や移動に適した合理的な分布状況であったと言うこともできる」と結論づけた。^⑮ 柴田は、「海を舞台とした人間活動」を、地域・海域全体を視野に入れつつ、空間という切り口で仕分けを試みているのである。

いずれも大変重要な視点であり、定義上の限界を乗り越えるだけの、十分な説得性がある。しかし、なお列島全域をカバーするだけの分析例が蓄積されてはいない。限界は限界として、依然として存在し続けている。

① 魚津知克「趣旨説明——『海 of 古墳』研究序説——」「海 of 古墳を考える」Ⅰ、海 of 古墳を考える会、二〇一一年。なお、ここでのいう古墳とは、古墳時代におこなわれた墓制全体、さらに一部の地域では古墳文化の影響により飛鳥時代及び奈良時代にも引き続き採用された墓制を指す。すなわち、高塚古墳だけでなく、横穴や石棺墓、埴輪棺墓なども含む。

② あくまで一例であるが、古代の城柵や囲壁集落が「方八町（九〇〇メートル弱四方）」を理念としてとみられることは、「区切りの範囲（結界）」の最大値を知るうえでの参考となる。木下良「律令時代における辺境村落の一類型」『人文地理』第三三巻第一号、一九七一年。木下は後に、「不整形であっても同じような機能と性格を持つものと同様に称したのであろう」と述べている（木下良『日本古代道路の復元的研究』、吉川弘文館、二〇一三年、二四一頁）。発掘調査等により、国府城を画する「方八町」について、実態として認めたい状況であること自体は、筆者も認識している。本稿では、土地利用の

理念として、一キロメートル弱の距離が、古代にも重視されていた根拠と理解する。

③ 現代の例ではあるが、霧の定義が「微少な浮遊水滴により視程が一キロメートル未満の状態」とされているのも、視認距離を区切る上での一つの参考となる。「一キロメートル」の設定自体は、メートル法を前提とした、人為的なものであろう。しかし、気象・立地条件の違いをこえて、判定者が見回すことによって、「視界が開けている／開けていない」ことを確認できる距離の目安として設定されている点に注目したい。本稿における八〇〇メートル―一キロメートル以内という距離設定は、一定の説得力を持つと考える。 http://www.jma.go.jp/jma/kishou/kyou/youngo_jp/korihmi 気象庁ウェブサイト。二〇一六年一月一日閲覧。

④ 白谷朋世（編）『金津山古墳発掘調査報告書』、芦屋市文化財調査報告第七五集、芦屋市教育委員会、二〇〇八年。

⑤ 竹村忠洋・白谷朋世（編）『打出小槌遺跡（第四一地点）発掘調査

報告書」芦屋市文化財調査報告第六六集、芦屋市教育委員会、二〇〇七年。

⑥ 阪神間の古墳時代における海岸線想定は、ながらく、現在の国道四三号線付近と理解されていたが、ボーリング調査成果に基づく近年の地質学的検討で、地点によってはさらに南であることが判明している（佐藤隆春「付論1 若宮遺跡の地質」『若宮遺跡（第三・四・一〇・一一・一六・一七・二五・三一・三二・三三・三四地点）発掘調査報告書』芦屋市文化財調査報告第三八集、芦屋市教育委員会、二〇〇二年）。

⑦ 武藤誠・有坂隆道・末中哲夫・村川行弘（編）『新修芦屋市史』本篇、芦屋市役所、一九七一年。なお、考古資料としてのこの古墳に対して、「阿保親王塚古墳」と呼ぶ場合が多いが、治定される被葬者名を含んでいるので避けた。

⑧ 増野晋次「山口県域における瀬戸内の前期古墳について」『海の古墳を考えるⅡ』、海の古墳を考える会、二〇一二年。小黒智久「越中十二町潟の古墳とその周辺」『日本海の潟湖と古墳の動態』海の古墳を考えるV、研究会集「海の古墳を考えるV」実行委員会（福井）・海の古墳を考える会、二〇一五年。

⑨ 熊本大学考古学研究室「天神山古墳測量調査報告」『宇土市史研究』

第四章 「海の古墳」研究の展望

以上のような限界は存在するものの、「海・海産物を資源として利用する、生業活動もしくは生産活動」が古墳時代の政治権力の形成に大きな役割を果たしたことは間違いない。さらに、列島という特性上、海を舞台とすることが不可避の、交通・交易、外交・軍事、移住の活動が、古墳時代における社会変動の大きな原動力になったことも疑いない。

第一七号、一九九六年。

⑩ 古墳時代においては、主に朝鮮半島を出自とする人々（渡来人）の集团的移住が顕著であるので、本稿では（４）を（２）から抽出した。⑪ 早野浩二「臨海の古墳時代集落」『研究紀要』第八号、財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター、二〇〇五年。田中元浩「紀伊地域」『古代学研究』第一九九号、二〇一三年。

⑫ 富加見泰彦・村田弘・久保和士（本文中に文責が久保にあるとの記述あり）『古墳時代の製塩遺跡における生産活動』『シンポジウム製塩土器の諸問題』、塩の会シンポジウム実行委員会、一九九七年。久保禎子「西庄遺跡における漁撈活動」『西庄遺跡』、財団法人和歌山県文化財センター、二〇〇三年。なお、後者文獻は、氏の早逝後に掲載されたものである。

⑬ 前掲久保二〇〇三年、三二五―三二六頁。

⑭ 柴田昌児「西部瀬戸内と芸予諸島周辺域における海人集団の動態」『古墳時代の海人集団を再検討する』二〇〇七年。柴田昌児「古代瀬戸内海における海上活動に関する一試論」『弥生研究の群像』みずほ別冊、大和弥生の会、二〇一三年。

⑮ 前掲柴田二〇〇七年、一五〇頁。

本章では、今後の「海の古墳」研究にむけた展望を示していきたい。

一 生業・生産論への展望

（一）水人・海人論と「海を舞台とした人間活動」の実態

第一章三（一）で触れたように、日本列島では、海浜部の生業を示す古墳時代の遺跡調査例が着実に蓄積されてきている。もともと平野部が少ない列島の隅々まで開発の手が及んだ結果なので、単純には喜べないものの、海浜部古代遺跡の様相が、これほどまであきらかになっているのは、世界的にも珍しいのではなからうか。発掘調査で蓄積された資料をもとに、古墳時代の漁撈や製塩の技術、さらには漁撈や製塩に従事した集団の在り方を具体的に検証できる段階に達しているのが、日本における考古学研究の現状である。

ここで念頭におかなければならないのは、倭の「水人」、あるいは「海人」という名で呼ばれる、海域に特化した人間集団の規定である。^② 海を舞台とした人間活動においては、海流や潮流、沿岸や海底の地形、気象や天文についての知識が、その成果に直結し、時には自身の生死の別れ目にさえる。さらに、漁撈活動では、対象となる魚介類の生態も熟知せねばならない。倭の「水人」、あるいは「海人」という集団の規定は、このような海の生業の特質と不可分である。^③

水人・海人論は、海をもとに歴史を捉えなおす研究視点へとつながり、従来型の陸からの歴史観に対する、新たな海からの視点が提示されてきた。^④ 一九九〇年代はじめには、『海と列島文化』が刊行され、今世紀では日本列島文化の海洋的特質を見事に浮き彫りにした諸論考が記憶に新しい。^⑤

これまでに述べたように、「海の古墳」は、古墳時代の各地域・各時期における「海を舞台とした人間活動」の様相と不可分のものである。逆にいえば、「海の古墳」を追求しようとするならば、先覚者である近藤義郎が目指したように、「海を舞台とした人間活動」の実態解明がおのずと課題になる。

古墳研究は、墳丘や周溝、葺石や埴輪列などの外部施設、石室（石槨）や石棺といった埋葬施設、多種多様な副葬品といった考古資料を対象とするため、どうしても、古墳そのものの追究をめざした個別論に精力を傾注しがちである。しかし、そもそも、古墳はどのような地理条件のもとに築造され、どのような人間活動を基盤としていたのか。「海の高墳」の研究は、限界に取り巻かれているがゆえに、限界をもたらししている課題を原理的に認識しやすい。「古墳研究の蓄積に立脚したうえで、古墳研究の枠をこえ、古墳時代そのものを追究する」という、あらたな研究視点が期待できる。

（二） 生業と生産との関係性

前章で、「海を舞台とした人間活動」を実証的に分析するため、時間や空間による切り口を採用した優れた先行研究を示した。筆者は、これらに加え、生業と生産との関係性の追及が、分析のもう一つの糸口であると考える。

辞書の記述では、生業は「生計を立てるための仕事」、生産は「人間の生活に必要なものをつくること」とされる。^⑦日本における考古学研究、特に戦後における考古資料を中心に据えた日本列島の原始・古代の研究では、後者の生産概念を重視してきた。^⑧とりわけ、国家形成期にあたると考えられている古墳時代においては、生産力の発展と社会の複雑化が軌を一にするものとして理解されてきた。しかし近年、前者の生業という言葉が、徐々に前面に出てきている。^⑨

《生産から生業へ》という用語選択の変遷の背景として、過去に生きた人々の暮らしを、生産力の発展段階のなかでのみ捉えるのではなく、生活史の文脈でも捉えなおそうという、日本の人文学研究をとりまく状況の変化を、まず挙げるべきであろう。確かに、古墳時代研究においても、王権論だけでその社会を描ききれないから、日常生活を積極的に研究対象とするのは、大変歓迎すべき傾向である。しかし、生産という言葉と、生業という言葉とは、容易に言い換えることができるのだろうか。この二つの言葉の背後には、われわれが思っている以上に、概念の断層が存在してはいないだろうか。

この問題については、人類学の分野で、松井健が興味深い指摘を行っている。松井は、「生業（活動）と生産（構造）」が、

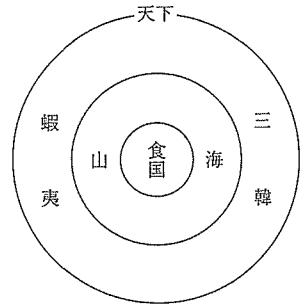
近接しつとも異なること」、「生業（活動）と生産（構造）が、固定的な図式として把握されるかたちで構造（機能）的に配置されているわけではな^⑩」いことを示す。

われわれ、考古学あるいは歴史学分野の研究者は、ともすると、生業という個別の「生計を立てるための仕事」が、社会的分業の進展により一定の方向へ収束していくことで、生産という「人間の生活に必要なものをつくること」に自ずと編成されていくと考えがちである。一方、研究者がミクロな分析を行いさえすれば、生産は生業にいつでも還元可能であるとも考えがちである。しかし、上記の松井の指摘をふまえると、事はそれほど単純でない。

本稿の対象資料にひきつけて考えるならば、例えば、製塩について、地域的分業による広域生産体制の枠内で捉えるのか^⑪、個別の遺跡における重層的な生業に焦点を当てるのか^⑫といった違いがある。どちらも重要な視点であるが、両者を単純に統合し、「固定的な図式として把握」するならば、意外な陥穽にはまるおそれがある。漁撈についても同様である。

以前、筆者は、海浜部集落における刺突具を中心とした漁具鉄器化の「遅れ」に、使用する側の戦略的な素材選択の結果を見出した^⑬。これにより、筆者は、鉄器化という考古学的事象について、生業の実態によって進展が大きく左右される場合があり、その場合には生産力の評価とは乖離する^⑭と考える。しかし、筆者の評価に対し、あくまで生産手段の資源配分の枠内で解釈できるという反論も想定できよう。

いずれの立場に立つにせよ、階層化された古墳時代の地域社会での「海を舞台とした人間活動」の実像にせまるためには、資料に立脚しつつ実証的に議論することが必要である。そのためには、時間や空間という切り口に加え、社会における生業と生産のあり方についての理論的な吟味が、今後要請される。その過程で、「考古資料は何をどこまで語れるのか」、あるいは、「考古資料以外の史資料をどのように活用して歴史解釈をおこなうのか」が見えてくるであろう。



第7図 倭国の統治空間原理
(森田喜久男による)

二 倭王権論への展望

(一) 統治原理と王権・政権

第二章で、「海の古墳」には様々な型式があり、地域ごと、時期ごとに推移していくことを示した。先行研究でもたびたび強調されてきたように、古墳時代の政治権力形成に、海を通じた交流、もしくは海を越えた交流が欠かせない要素となっていることは間違いない。今後は、各地域での当時の海岸地形を見極めつつ、「海の古墳」を抽出した上で、時期ごとの動態を十分に明らかにすることが必要である。

古代史研究では、倭王権の統治原理における「山海の政」の重要性が提唱されている。森田喜久男は、岡田精司や吉村武彦の論をふまえつつ、王権が統治する「天下」の中には、おもに農業生産が展開され王が主体的に差配できる領域としての「食国」と、神と王とが協調して統治する「山海」が、ともに包摂されることを指摘した(第7図^⑭)。なかんずく、海には、かなたにある朝鮮半島、中国大陸へむけて、強烈な対外意識が投影される。まさに、古墳時代前期に近畿中央部政権が倭王権中枢としての位置を獲得し、東アジア情勢の中でそれを維持しつつ国家形成にいたった過程が、様々な「海の古墳」の築造契機として指摘できる。

さらに、列島各地に分布する、C1群を中心とした「海の古墳」の様相から、近畿中央部政権に一元的に収斂しない地域権力のあり方が見通せる。先行研究では、日本海側におけるあり方が明らかになっているが、九州北部から南島へといたるルート、東海地方から東日本さらには北日本へと太平洋沿岸を通るルートにも、点々と「海の古墳」が認められる。これは、各地域を明確な結節点とした社会的ネットワークが、列島という地理条件で発展し帰結した形態であり、近畿中央部政権が放射状に編成したものとは考え難い。「山海の政」という理念自体は、倭王権中枢の制御が及ぶ形で、地方支

配者層が明確に受容し共有しつつも、列島沿岸では地方政権及び傘下の地域首長同士で「海を舞台とした人間活動」の主體的な連携がなされ、各地域首長は生業と生産とを巧妙に重ね合わせつつ地域内支配を貫徹させるという三層が、古墳時代社会構造の基調であると考ええる。第二章で触れたA-Cの各群の動態も併せ、その第一線に立った人々の遺したモノユメントこそ、「海の古墳」であることを示している。

（二） 生業を生産化する「統治の論理」／生産を生業化する「暮らしの論理」

ここで注意されるのは、「山海の政」を具現化する海部と山部という二つの部が、本来は《海の漁撈・山の狩猟》という地理環境に固有の生業を出発点としつつも、古墳時代中期末に比定できる雄略朝ごろを境として、徐々に生産物貢納を目的とする部の一つとして位置付けられていくという点である。¹⁸

古墳時代前期から中期前半にかけての倭王権や地方政権にとつて、農業生産こそ核心的な権益として位置づけられていたに違いない。一方で、異なる生業も含まれる社会的ネットワークも、支配の対象として認識されていたのは想像に難くない。「山海の政」を統治原理に組み込み、海部と山部という二つの部を位置づけることで、倭王権や地方政権は、固有の生業に干渉することが可能となった。

さらに、複合生産型臨海集落の設置により、生業は、権力にとつて制御可能な生産へと転化する。古墳時代中期中頃を境に、各地の首長墓における鉄製漁具の副葬事例が激減し、一方で、和歌山県田辺市磯間岩陰遺跡¹⁹のように、海に近接したA群s類やA群t類の古墳、横穴墓、岩陰へと鉄製漁具の副葬が移行していく。これらも、生業の場に統治原理を巧妙に持ち込むことで、「海の生業」を「海の生産」に転化させることに成功したことを示す資料であると考ええる。

上記の転化の背後に、海の彼方、すなわち朝鮮半島の存在があることを、筆者は以前指摘した²⁰。半島情勢という「海の彼方の危機」が、海を越え、「今そこにある危機」となり、「天下」を脅かしているという論理の舞台装置に、海が利用さ

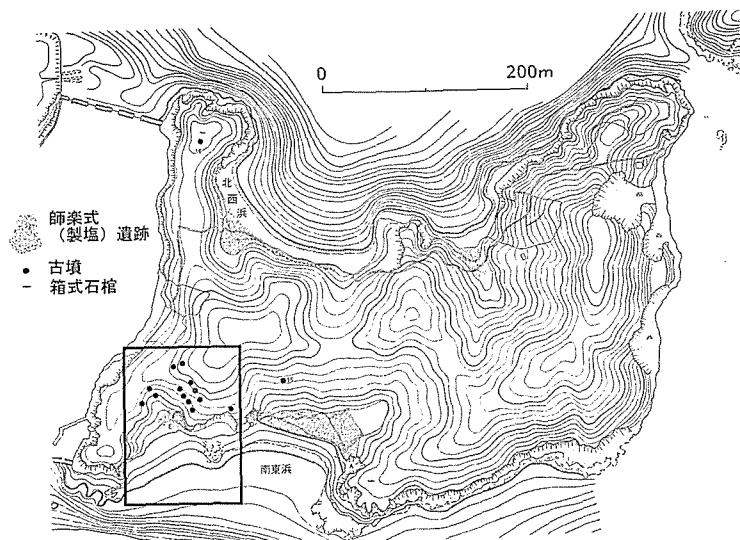
れたのである。在来の生業圏をいったん解体するために用いられた、生業を生産化する「統治の論理」である。

一方、これに並行して、まったく逆方向の論理も海浜部では展開される。弥生時代を通して拡大していった、「海を舞台とした」遠隔地間交流は、交易を生業の中に含む「海村」の成立へと展開した。²¹⁾ この流れは、一方では白井克也や久住猛雄が「博多湾貿易」と呼ぶ、権力にとって制御すべき、モノ・技術・情報の流通へと結実し、生産の基礎となる。しかし、前章で触れた複合生産型臨海集落の分析でも明らかになったように、拡大するインフラを巧みに利用する形で、生業はしぶとく生き残っていく。

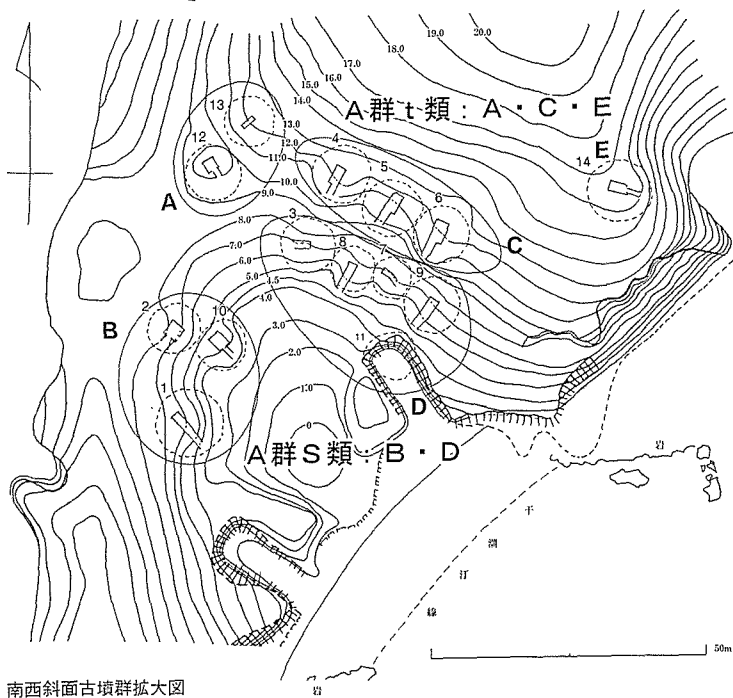
これは決して、あからさまな統治への叛逆ではない。生業の一部が、統治原理によって生産へと引き裂かれても、むしろ引き裂かれたからこそ、人々は、その場で、生まれ、育ち、死んでいく。生産の場の外縁に、再び生業が徐々に貼り付き、生産の一部を、確実に、人々の生活によって形成される環の中へと取り込んでいく。生産を生産化する「暮らしの論理」である。

以上のような、生産を生産化する暮らしの論理をたどるうえで重要な資料が、本稿でA群s類、A群t類として分類した小型の円墳等のうち、六世紀以降に海岸や島嶼で群集する古墳、すなわち「海の群集墳」²²⁾である。この「海の群集墳」については、研究史上の最初から、近藤義郎によって築造背景が注目されていたことを、第一章で示した。近年、群集墳の研究が進展する中で、森本徹が、「生活基盤である地域」を海そのものに設定することで、農耕社会を基盤とする内陸の群集墳と同様に、散在型や集約型といった類型区分が可能であることを示している。²³⁾

興味深いのは、香川県喜兵衛島古墳群（第8図）のように、六世紀後半から七世紀にかけて一気に規模が拡大された製塩遺跡に接した場所に築造された群集墳であっても、それを構成する古墳は海岸近くのA群s類に偏らず、一段上がったA群t類とはほぼ同数である点である。²⁴⁾ また、喜兵衛島古墳群では、確かに、生産様相を示す漁具や製塩土器が一部の古墳に副葬されるものの、ほとんどの古墳は鉄鏃、刀子、耳環といった該期の群集墳で一般的な副葬品で構成される。²⁵⁾ 喜兵衛



1



2

南西斜面古墳群拡大図

第8図 喜兵衛島古墳群 (1) 南西斜面拡大図 (2)

島古墳群は、典型的な集約型群集墳であり、被葬者が塩の生産と密接に関連していたことは疑いない。しかし、古墳群の構成は海をひたすら志向するものではなく、副葬品の内容も、内陸の群集墳と共通する様相が濃い。安室知が注意をうながした、「海付きの村」に暮らしつつも海を対象とした生産活動に偏向しない、「農漁民」の概念にも通じる要素である。

同様に、複合生産型臨海集落においても、興味深い事実を指摘することができる。先述の久保和士の分析によれば、西庄遺跡では、製塩活動が想定される盛夏に加え、秋から冬にかけても漁撈が不活発であった。動物遺存体の存在から、この季節は、シカ・イノシシの狩猟が盛んに行われていたと、久保は想定している。時間のサイクルの中で、海に偏向しない生業複合が達成され、多様な生産物をうみだす基礎となったことがうかがわれる。

「統治のための墳墓」を展開させることで、生業を生産化する「統治の論理」を強力に浸透させていった王権・政權と、統治原理を受け入れつつも、生産を生業化する「暮らしの論理」を保持して生活した一般の人々。同時に存在する二つの論理^②のせめぎあいの中、古墳時代社会が構成され推移していったことが、「海の高墳」の分析から見えてくる。

- ① 近年の代表的成果として、以下を挙げることができる。岩本正二・大久保徹也『備讃瀬戸の土器製塩』吉備考古ライブラリー一五、吉備人出版、二〇〇七年。早野浩二『伊勢湾沿岸と三河湾沿岸における臨海の集落と古墳』『古墳時代の海人集団を再検討する』発表要旨集、第五六回埋蔵文化財研究集会実行委員会、二〇〇七年。内田律雄『古代日本の漁撈民』、同成社、二〇〇九年。
- ② すでに一九六〇年代、『魏志』東夷伝倭人条の記載に基づき、岡崎敬が優れた論考を著している（岡崎敬「倭の水人」『日本民族と南方文化』、平凡社、一九六八年）。
- ③ 宮本常一『日本文化の形成』上・中・下、そして、一九八一年。
- ④ 国分直一『海上の道 倭と倭的世界の模索』、福武書店、一九八六年。国分直一『東アジア地中海の道』、慶友社、一九九五年。網野善彦『海と列島の中世』、日本エディタースクール出版部、一九九二年。網野善彦『日本社会再考』、小学館、一九九四年。大林太良『海の道海の民』、小学館、一九九六年。
- ⑤ 網野善彦（ほか編）『海と列島文化』全二巻（別巻含む）、小学館、一九九〇～一九九二年。野地恒有『漁民の世界』、講談社、二〇〇八年。後藤明『海から見た日本人』、講談社、二〇一〇年。
- ⑥ 農耕社会については、都出比呂志のきわめて優れた研究がある（都出比呂志『日本農耕社会の成立過程』、岩波書店、一九八九年）ので、正確には、「古くて新しい」研究視点である。
- ⑦ 柴田武・山田進（編）『類語大辞典』、講談社、二〇〇二年。
- ⑧ 甲元真之「考古学による生業研究のあゆみ」『生業からみる日本史』歴史フォーラム、吉川弘文館、二〇〇八年。

- ⑨ 一瀬和夫「総論 生業の痕跡」「古墳時代の考古学」5時代を支えた生産と技術、同成社、二〇一二年。
- ⑩ 松井 健「序章 『生業と生産の社会的布置』と民族誌という企図」「生業と生産の社会的布置」国立民族学博物館論集1、岩田書院、二〇一二年、五頁。
- ⑪ 森下智恵「若狭の土器製塩の盛行と古墳」「古墳時代の海人集団を再検討する」發表要旨集、第五六回埋蔵文化財研究集会実行委員会、二〇〇七年。大久保徹也「塩生産・流通の古墳時代後期的特質について」「古墳時代の海人集団を再検討する」發表要旨集、第五六回埋蔵文化財研究集会実行委員会、二〇〇七年。
- ⑫ 富加見泰彦「漁場と製塩」「古墳時代の考古学」5時代を支えた生産と技術、同成社、二〇一二年。
- ⑬ 魚津知克「漁具と漁業生産」「古墳時代の考古学」5時代を支えた生産と技術、同成社、二〇一二年。
- ⑭ 岡田精司「大化前代の服属儀礼と新嘗」「古代王権の祭祀と神話」、塙書房、一九七〇年。吉村武彦「天皇」の誕生と山海の政」「美と新生」、東信堂、一九八八年。
- ⑮ 森田喜久男「日本古代の王権と山野河海」、吉川弘文館、二〇〇九年。
- ⑯ 下垣仁志「古墳時代の王権構造」、吉川弘文館、二〇一一年。
- ⑰ 溝口孝司「弥生社会の組織とその成層化」「考古学研究」第五七卷第二号、二〇一〇年。
- ⑱ 注⑮前掲書。
- ⑲ 堅田直「磯間岩陰遺跡調査概要」、田辺市教育委員会、一九七〇年。
- ⑳ 魚津知克「古墳時代社会における鉄製漁具副葬の意義」「遼古登攀」、『遼古登攀』刊行会、二〇一〇年。魚津知克「日韓の漁具」「武器・武具・農工具・漁具」、『韓日交渉の考古学』三國・古墳時代」研究会、二〇一四年。
- ㉑ 武末純一「三韓と倭の交流」「国立歴史民俗博物館研究報告」第一五一集、国立歴史民俗博物館、二〇〇九年。
- ㉒ 白井克也「靑島貿易と原の辻貿易」「弥生時代の交易」第四九回埋蔵文化財研究集会發表要旨集、埋蔵文化財研究集会第四九回研究集会実行委員会、二〇〇一年。久住猛雄「博多湾貿易」の成立と解体」「考古学研究」第五三巻第四号、二〇〇七年。
- ㉓ 森本徹「群集墳の類型からみた海の群集墳」「海の古墳を考える」I、海の古墳を考える会、二〇一一年。
- ㉔ 前掲論文一四六頁。なお、ここで森本が提示した地理空間モデルは、松尾充晶が提示した八世紀の地域社会における村落と社との関係モデル（松尾充晶「古代の祭祀空間」「史林」九八巻一号、二〇一五年、二三頁）と共通する。松尾は、「こうした社は、水系や浜といった自然環境要因に基づく生業単位に対応する」と結論付けており（同三一頁）、通時的要素を抽出することができる。
- ㉕ 弘田和司「喜兵衛島古墳群の形成とその特質」「喜兵衛島」「喜兵衛島」刊行会、一九九九年。
- ㉖ 尾上元規「副葬品からみた喜兵衛島古墳群の性格」「喜兵衛島」「喜兵衛島」刊行会、一九九九年。
- ㉗ 安室知「『農漁民』を超えられるか」「非文字資料研究」、『神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料研究センター、二〇一〇年。安室知「百姓漁師」と「漁師百姓」」「国立歴史民俗博物館研究報告」第一六二集、国立歴史民俗博物館、二〇一一年。なお、筆者は、現在でも無人の喜兵衛島ではなく、「生活基盤である地域」（注㉓森本論文）内の別の場所であることがおこなわれていたと想定している。この点を考えるにあたり、高橋真希が、律令制下で海部が農耕に携わっていた可能性を指摘しており（高橋真希「海部と米生産」『考古学

と生活文化」同志社大学考古学シリーズV、同志社大学考古学シリーズ刊行会、一九九二年、興味深い。

②③ 第三章注⑫前掲久保二〇〇三年、三二六頁。

②④ なぜ、この二つの論理は、同時に存在しうるのだろうか。個人のレベルでは、身体性へと帰結することができらるだろう。そして、これを考古学的に研究する場合、資料操作において重要となる概念は、動作連鎖（山中一郎「動作連鎖の概念を巡って」『日本考古学協会二〇〇九年度山形大会研究発表資料集』、日本考古学協会二〇〇九年度山形

大会実行委員会、二〇〇九年）であると考ええる。一方、集団レベルでは、（生産）構造と（生産）行為との関連性の追及となるだろうから、本来は社会学的概念（アンソニー・ギデンズ『社会の構成』、門田健一訳、勁草書房、二〇一五年）ながら、考古学研究においても導入事例が増加しつつある、行為者性（エージェンシー…三好玄「首長制とは何か」『考古学研究六〇の論点』、考古学研究会、二〇一四年）という概念が鍵となりうる。いずれにしても、今後の課題として、改めて論じたい。

終章 —— 海という視点 ——

以上、「海の古墳」研究の意義、限界、展望について述べてきた。できるだけ冷静に、客観的な事実の提示につとめたつもりであるが、一部で筆者の想念が溢れてしまったかもしれない。どうかご寛恕いただきたい。

地球上のすべての大陸を、海が取り囲んでいる。とすると、海の近くに墳墓を築くことは特段珍しいことではないようにも思える。しかし、人類の歴史をひもとくと、海（もしくは湖）の近くに墓や祭祀場を好んで築いた時代や地域と、海が埋葬地としてほとんど意識されていない時代や地域との双方が存在しているようである。本稿では、前者の代表例として、日本列島における「海の古墳」を示したのであるが、上記の視点から、世界各地との比較をおこなうことで、「海の古墳」の特性がさらに明らかになっていくことが期待される。

第三章で論じた、研究上の限界は依然として存在する。しかし、限界の先には、古代世界全体へと開かれた海路がある。その海路は、「海ゆかば」のような、統治原理の礼讃を、ただひたすら唱えるものではなからう。

挿図出典

第1図 大手前大学史学研究所撮影（GEOソリューションズ委託）

第2図 神戸市教育委員会提供（前田佳久・浅谷誠吾「舞子浜遺跡第7

次調査」平成5年度 神戸市埋蔵文化財年報」、神戸市教育委員会、

一九九六年掲載原版)

第3図 田邊朋宏(編)『免鳥古墳群 範囲確認調査概要報告書』、福井市教育委員会、二〇〇七年(福井市教育委員会原図提供・筆者により説明語句追加)

第4図 安田滋(編)『西求女塚古墳発掘調査報告書』、神戸市教育委員会文化財課、二〇〇四年(筆者により説明語句追加)

第5図 竹村忠洋・白谷朋世(編)『打出小槌遺跡(第41地点) 発掘調査報告書』、芦屋市文化財調査報告第66集、芦屋市教育委員会、二〇〇七年(筆者により説明語句追加・削除)

第6図 早野浩二「臨海の古墳時代集落」『研究紀要』第8号、財団法人愛知県教育サービスセンター・愛知県埋蔵文化財センター、二〇〇五年

第7図 森田喜久男『日本古代の王権と山野河海』、吉川弘文館、二〇〇九年

第8図 1 喜兵衛島研究会『喜兵衛島』、『喜兵衛島』刊行会、一九九九年(筆者により黒枠・説明語句追加)

2 弘田和司「喜兵衛島古墳群の形成とその特質」『喜兵衛島』、『喜兵衛島』刊行会、一九九九年(筆者により説明語句追加)

(大手前大学史学研究所主任)

was fully cognizant of the necessity of constantly enhancing the ROC's image by the external display of the systematic superiority of the ROC over the PRC. The U.S. then sought a means of realizing high growth in the Taiwanese economy within the liberal system, and with that goal in mind it put genuine pressure on the ROC from 1959. As noted above, the demands on the ROC for systematic reform at the end of the same year were nothing other than the result of this policy, and the change in the character of Taiwan policy shifting to an emphasis on the economy was implemented in a series of processes that culminated in these demands. In this manner, under the new Taiwan policy and the increasingly dire circumstances of the Cold War struggle over systems and ideology, Taiwan appealed to international society using its economic growth as a showcase, fulfilling the same function as West Berlin, an isolated island on the European continent, as an island in the Far East.

The Significance, Limitations and Prospects of Research on Tumuli and Graves by the Sea

by

UOZU Tomokatsu

Within the tumuli and graves of the Kofun period in Japan, there are some situated near the sea. In this article, I define the tumuli and graves constructed near the sea by those whose livelihood was deeply connected with and centered on the sea as "tumuli and graves by the sea," and I argue the benefit and limitations of the concept of tumuli and graves by the sea and then state the prospects for future study.

In the first section, I point out the following two points regarding the significance of this research. The first became the impetus for a re-evaluation of the location of tumuli. The second can be called the establishment of a perspective on tumuli and graves by the sea as one form of coastal archaeological site that earlier human societies had left in terms of the natural environment of the sea. Both have great significance in highlighting the essence of tumuli that were "tombs for ruling the land" in an overview of all tumuli society.

In the second section, I classified the tumuli and graves by the sea and provided specific examples of each type. I focused on three points of classification—size, location, and the relationship of the face of the tumulus to the seashore. Among these relationships, the relationship of the face of the tumuli and the seashore was a criterion that only applied to the three types of keyhole-shaped tumulus mounds, i.e. *zenpô kôen fun*, *zenpô kôhō fun*, and *hotatekai-shiki kofun*. By this method, I was able to elucidate the trends in location and period in which tumuli and graves by the sea were built from the period of members of regional groups to that of the Yamato kingdom.

In the third section, I indicate the limitations currently facing the study of tumuli and graves by the sea. This, in other words, is a problem of definition. The following are the two principal definitions. The first is of limited utility for scholarship because there is a lack of sources that would clarify the extent of tumuli and graves by the sea. The second is of limited use in scholarship because the definition of “human activity centered on the sea” is unclear. There has been some excellent scholarship that allows us to overcome these limitations, but the number has been insufficient to be applied to archaeological artifacts throughout Japan.

In the fourth section, I indicate future prospects of the study of tumuli and graves by the sea. The activities of production and creation that used the sea and products of the sea as resources unquestionably played a major role in the formation of political authority during the Kofun period. In addition, transport, trade, diplomacy, military and residential practices conducted near the sea because it was an archipelago were a powerful motive force in the social change of the Kofun period. The author particularly points out the contribution to theories of ancient livelihood and production and Yamato kingship through the study of tumuli and graves by the sea.

Two points can be offered as the chief results of this research. First, is an effective grasp of the issues in this research due the recognition of the limitations of the methodology of the research. The study of tumuli and graves by the sea is bound by limitations. However, precisely for this reason, the issues that set the limitations are easily grasped in principle. Based on the achievements of the study of kofun, but also going beyond their boundaries, the inquiry into the Kofun period itself becomes possible through a study of tumuli and graves by the sea. Second is the fact that I succeeded in abstracting two types of logic: the logic of rule and the logic of life that coexisted in Kofun period society. The former was the logic that through the Yamato monarchy and regional rule permeated and made livelihoods

productive. The latter was the logic created through the general populace living and accepting of the rulers that made a livelihood of production.

All the continents on this earth are surrounded by the sea. It can be assumed that constructing graves and tumuli near the seas was not rare. However, in human history, there were both eras and regions in which there was a preference for building graves and ritual sites near the seacoast and others eras and regions in which there was almost no consciousness of the seaside being a burial place. From this point of view, having conducted a comparison of sites around the world, we are likely to further clarify the special characteristics of tumuli and graves by the sea.